

学年部会	テーマ「読書活動を通じた言語活動の育成」
実践内容	「読書好きの子を増やすための取り組み」
教科・単元名	4年 国語「プラタナスの木」他

1. 実践活動のねらい

クラスの半数以上の児童は、本好きの子が多かった。しかし、一部の子の読む本のジャンルは偏っていたり、読書習慣のない児童がいたりしていた。また、子どもたちの実態として、自分が思っていることを相手に伝わるように表現することや、友だちの意見に感想を伝えたり、話をつなげたりすることが苦手な子も多く見られた。そのため、自分の考えを伝えるための表現力や、友だちの話を共感的に聞く姿勢など、指導していく必要があると考えた。そこで言語能力の育成にまずは取り組むことにした。言語能力の育成は、国語だけではなく、算数などの他教科、行事など、たくさんある。その中でも特に、学習の基礎となる国語を通して言語能力の育成をする取り組みを行っていきたい。子どもたちが好きな読書活動を更に充実させることで、最終的には言語活動の充実につなげていければと考えている。

2. 実践の内容・経過

本好きな子を増やすためには、まず本を手にする習慣を身に付けること、読むことが楽しいと思ってもらうことが大切である。本実践では、読書感想文・感想画に取り組んでいる。自分の考えを文章や絵として表し、読み合い、見合う活動を通して感じ方を比較することで、「自分の考えが伝わる実感」や「友達への考えや思いを受け入れる気持ち」が高まってほしいと考えている。

■具体的な手立て

(1) 本を手にとってもらうために

●読書環境の充実

「読みたい本がわからない」「本の探し方がわからない」という子のために、読み聞かせ、本の紹介、学級文庫の充実を行っている。特に、学級文庫には、クラスの子の興味に合わせた内容や、自分が昔読んでいた本、学習との関連のある本など、様々なジャンルの読み物を置いている。置く前に、内容を少し紹介したり、途中まで読んだりしておくことで、手に入る児童は多かった。また朝読書以外にも、学習が早く終わった後の時間に読書する習慣を定着させることで、自然と学級文庫の本や借りている本を手にする習慣につながっている。

(2) 読書の幅を広めるために

●学習で利用する本の設置

国語の読み物教材（「この本、読もう」コーナーの本など）、理科「星」に関する本、総合「ウサギ」や「バリアフリー」に関する本など、学習してきたことを伸ばすために、また学習をより深く学ぶために、学年図書コーナーに図書室から本を選んで一定期間置いておいた。

総合の学習では、調べ学習として事前にどんな本が必要で、どんな本が図書室に足りないのか年度当初に調べておくことで、不足本を前期の児童図書予算で購入でき、一人1冊は手元に置いて調べることができた。

●読書感想文、感想画への取り組み

国語の単元「心に残ったことを感想文に書こう」では、感想文を書いたことがない児童が多かったため、導入で「本をよんで」を活用した。掲載されているいくつかの作品を紹介し、感想文がどんなものかを意識させた。その上で、教科書教材「プラタナスの木」を学習し、ワークシートを使いながら感想文の書き方を指導した。

昨年は同学年の児童が出てくる7冊の本を選書して、その中から感想文を書いたのだ



が、今年度は児童の実態も考慮し、今まで読んできた本（学級文庫には昨年、選書した本も置いておき、その中から選んでもよいことを伝えていた。）の中から書くことにした。その際、「プラタナスの木」で利用したワークシートを再度利用することで、感想文を書くことに抵抗がある児童にも、「クラス全体で取り組んだ時と同じように書けばよい。」と、スムーズに取り組んでいた。（現在、感想文は書き途中。）

図工の「物語から広がる世界」では、読書感想画に取り組んだ。感想文と違って、感想画に取り組んだことがある児童は多かった。今回は課題図書である「幽霊魚」をクラスで読み聞かせをし、その後、感想画に取り組んだ。何日もかけて読み聞かせをするために、登場人物や特徴など、大事な部分は画用紙にメモしたり、読み聞かせの前後にクラス全体で共有する時間を設けたりすることで、忘れてしまっても、すぐに話の内容に入り込みながら聞けていた。毎日、少しずつ読み聞かせていたが、「早く続きが聞きたい。」と続きを待ち望んでいたり、章のタイトルを先に教えておくと「次はやっと〇〇の章だ。」と、内容を想像しながら待っていたり、ワクワクしながら待つ読書の楽しみを感じている児童が多かった。現に、待ちきれないで先に図書館で本を借りてくる子や、読み終わった後にお家の人に買ってもらう子、教室や図書室に置いてある本をもう一度自分で読み返そうと借りていく子など、その本に対する興味は高かった。

実際に絵を描く時には、読書感想文の時と同様に、読書感想画のカレンダーを参考にした。読み聞かせの時に作成したメモを見たり、もう一度自分で本を読み返したりして、物語の世界を自分の中でイメージし、絵に表していた。全員が同じ本であるので、内容を共有できたこと、毎日少しずつ本を読み聞かせることで味わったワクワク感を維持し、絵に表せていたように感じた。

1. 考察・成果や課題

今回の読書感想文、感想画への取り組みは、本への興味を高められた。特に、課題図書である「二日月」、「幽霊魚」は興味をもって読んでいた。教師の声かけの有効性を実感した。時間確保をすることで、読書の習慣化はできているが、その一方で、読書が苦手な子や、読む本のジャンルが偏っている子へのアプローチは、まだ充分とは言えない。身近に本を置いたり、紹介したりする環境面を整えることは現在も継続して行っている。それと同時に、今後はいかに教師が本の紹介をするのが課題である。教師の紹介が、子どもたち同士の紹介に繋がり、最終的には主体的読書へと繋がっていければと考えている。

読書活動の広がりとしては、図書係の本に関するクイズや、図書委員のお薦めの本コーナーなど、児童の主体的活動へも繋がっており、少しずつではあるが、クラスから全校へ読書を広める取り組みにも繋がっているところである。子どもたちの活動に限ったことではなく、読書カレンダーを使っただけの読書感想画の指導、学習で使用する本の紹介（五味太郎「ようすをあらわすことば」）など、図書担当として全校へ読書活動を広めたいとも考えてはいるが、現状としては同じ学年と一部のみに留まっている。全校へ取り組みを広めるために、今後も継続していきたい。

読書活動を充実させることで、言語活動の充実を図れればと考えているが、読書活動がまだ充実できていないので、言語活動の充実には繋がっていないのも現状である。引き続き、「自分の考えが伝わる実感」や「友達の考えや思いを受け入れる気持ち」が高まる活動に取り組んで、自分の考えを伝えるための表現力や、友だちの話を共感的に聞く姿勢を育てていきたい。